

大和郡山市出屋敷町

# 菩 提 山 遺 跡

発掘調査概要報告書

1988.3.

大和郡山市教育委員会

## 序

この概要報告書は、昭和62年度に行った菩提山遺跡の発掘調査に関するものです。菩提山遺跡は以前から遺物散布地として知られていた遺跡ですが、これまでに本格的な発掘調査を受けたことがありませんでした。今回、市の社会教育館を建設することになったため事前調査を実施したところ、古墳時代中ごろの円墳と方墳、弥生時代中期～古墳時代初めごろの堅穴式住居跡などがみつかり、ひじょうに重要な遺跡であることがわかりました。

遺跡が位置する矢田丘陵の東南部は、小泉大塚古墳・六道山古墳・笹尾古墳などの有名な古墳が多く、きわめて重要な地域であると評価されてきましたが、今回の菩提山遺跡の調査成果は、この地域一帯の古代史の解明に向けて、さらに貴重な資料を提供したと言えるでしょう。

今後、こうした先人の遺した貴重な文化財の保護を積極的に推進するため、埋蔵文化財の発掘調査に鋭意取り組んでまいりますので、市民の皆さん方のご指導・ご協力を賜わりますようお願い申し上げます。

昭和63年3月31日

大和郡市教育委員会

教育長 井 上 三 夫

## 例　　言

- 本書は、大和郡山市出屋敷町2691番地他において実施した菩提山遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 調査は、出屋敷町社会教育会館（通称ミニ体育館一計画主管・保健体育課）建設工事に伴う事前調査として実施した。
- 調査期間は、昭和62年10月12日～同12月19日まで、調査面積は約800m<sup>2</sup>に及ぶ。
- 調査に際しては、下記の作業員・補助員の参加を得、また、関係機関の諸氏からは多数の御教示をいただいた。共に御芳名をあげ、感謝いたします。（敬称略）  
（作業員） 岸田勝信・西川信義・増田高雄・森村清春・崎山庄勝・堀川正治・杉山典三  
（補助員） 朴美子・秋山幸枝・荻田智恵美・藤丸幸恵・竹田むつみ  
（指導） 石野博信・寺沢薰・中井一夫・関川尚巧・吉村公男・奥田尚（以上県立橿原考古学研究所）  
千田剛道（奈良国立文化財研究所）
- 調査は、大和郡市教育委員会（教育長堀口喬三）を調査主体として行ない、現地は同教育委員会社会教育課技師服部伊久男・山川均が担当した。
- 本書の執筆・編集は服部が担当した。

## 本文目次

I	調査に至る契機と経過	1
1.	はじめ	1
2.	調査日誌抄	2
II	位置と環境	3
III	調査の概要	5
1.	遺跡の概観	5
2.	遺構	6
3.	遺物	11
IV	総括	17

## 図目次

- 図1 調査地位置図
- 図2 調査地周辺の遺跡分布図
- 図3 遺跡周辺の地形
- 図4 2号墳主体部平面図
- 図5 調査区平面図
- 図6 第3・4号墳穴式住居平面図
- 図7 土坑SK-06・15断面図
- 図8 第4号墳穴式住居床面出土上器実測図(S=1/3)
- 図9 1号墳周溝内出土埴輪(記号文)拓影(S=1/2)
- 図10 1号墳周溝内出土埴輪拓影(S=1/3)
- 図11 1号墳周溝内出土埴輪拓影(S=1/3)
- 図12 1号墳周溝内出土埴輪拓影(S=1/3)

## 写真目次

- 写真1 調査風景
- 写真2 菩提山遺跡空中写真(西から)
- 写真3 周辺の遺跡
- 写真4 2号墳主体部 棺底施設の検出状況(西から)
- 写真5 4号住居周壁溝(東から)
- 写真6 土坑SK-06堆積層(西から)
- 写真7 土坑SK-02甕出土状況(西から)

## 表目次

表1 1・2号墳の様相

## 図版目次

- 図版1 調査区空中写真（西上空から）
- 図版2 (1) 1号墳周溝（東から）  
(2) 1・2号墳周溝（北から）
- 図版3 (1) 2号墳周溝（北東から）  
(2) 2号墳主体部全景（西から）
- 図版4 (1) 2号墳主体部鉄器出土状況（南から）  
(2) 第3・4号竪穴式住居全景（東から）
- 図版5 (1) 第4号竪穴式住居の周壁溝（北から）  
(2) 第4号竪穴式住居床面の土器出土状況
- 図版6 (1) 埋葬施設1全景（西から）  
(2) 土坑SK-06全景（北から）
- 図版7 2号墳主体部出土鉄製品
- 図版8 1号墳周溝出土遺物
- 図版9 第4号竪穴式住居床面出土遺物
- 図版10 土坑SK-06出土遺物
- 図版11 1号墳周溝出土埴輪
- 図版12 1号墳周溝出土埴輪

## I 調査に至る契機と経過

### 1. はじめに

大和郡山市出屋敷町2691番地外7筆の土地が、市の社会教育会館建設予定地として選定されたのは昭和59年のことであった。当該地は、菩提山遺跡として『奈良県遺跡地図』に登録された周知の遺跡であったため、市教育委員会社会教育課では事業の主管課である隣りの保健体育課と事前協議を進め、用地関連の事務が完了した年度において調査を実施することで一応の合意に至り、この昭和62年度に調査を行う結果となったものである。

調査地は、雜種地・柿畠・畠などの地目からなる丘陵の先端部であり、表土直下が地山面であることが知れたため、調査は最小限の機械力を利用しつつ進めることとした。調査はまず、遺構有無の確認を目的として幅3mの試掘溝を用地内に井型に配して行なった。この試掘調査の結果、埴輪・弥生式土器などの遺物と溝・ピットなどの遺構を検出したので、以後、試掘トレレンチを拡張する形で本調査に移行した。調査に当っては、調査地全体をカバーできるように、西南隅を起点として東西方向にA～Mのアルファベット、南北方向に1～15の算用数字を付し、3×3mの小地区を設定し、遺物取上げ、遺構埋土の記録等に正確を期した。現地調査は、12月15日の埋戻しをもって終了している。なお、12月5日は、地元住民を対象とした現地説明会を開催し、約20名の参加を得、12月20日に市立矢田南小学校を対象とする見学会を催し、約130名の児童の参加を得ることができた。専門的な検討会とは別に、こうした一般市民向けの普及活動の必要性を感じた次第である。



図1 調査地位図 国土地理院 1:25,000地形図「大和郡山」(1984) 使用

## 2. 調査日誌抄

10. 12 (月) 晴 試掘調査開始。
10. 22 (木) 晴 墳輪片を出土する古墳周溝の掘り下げ。
10. 26 (月) 曇 試掘調査終了。
10. 27 (火) 晴 本調査開始、拡張区の表土除去作業。
10. 29 (木) 晴 小地区割設定、遺構検出作業開始。
11. 5 (木) 晴 弥生時代の隅丸方形住居S I-02を検出する。
11. 9 (月) 晴 2号墳主体部検出、鉄斧等が出土する。
11. 11 (水) 晴 竪穴住居S I-02・03実測 ( $S = 1/20$ )
11. 19 (木) 晴 2号墳主体部精査。棺底に特異な施設が検出される。
11. 20 (金) 晴 航空写真撮影。
11. 25 (水) 晴 中央区の拡張を開始。
12. 5 (土) 曇 午後、地元向現地説明会。
12. 8 (火) 晴 細部写真撮影。
12. 11 (金) 曇 平板測量 ( $S = 1/100$ )
12. 12 (土) 晴 調査終了、器材撤収。
12. 15 (火) 晴 埋戻し終了、全工程を消化する。



写真1 調査風景



写真2 菩提山遺跡空中写真（西上空から）

## II 位置と環境

富雄川に併行して南北に走る幅約2km、標高約200～300mの細長い丘陵地は、矢田丘陵あるいは松尾丘陵と呼ばれている。この丘陵の東南裾部には低くなだらかに起伏をなす低丘陵地が展開しているが、菩提山遺跡もこの派生する低い丘陵地に立地している。矢田丘陵の終点に近い位置であり、行政的には大和郡山市に含まれるが、斑鳩町との境に接している場所である。

この矢田丘陵の東南裾部には多くの遺跡が知られている。縄文時代の遺跡は知られていないが、



図2 調査地周辺の遺跡分布図 (S = 1 : 20,000)

『大和郡山市遺跡地図』(1987) 使用

弥生時代に入ると多くの遺跡が成立している。西田中遺跡（中～後期）、小泉遺跡（中期）、六道山遺跡<sup>註3</sup>（中～後期）などであり、前期まで遡るかどうかは不明であるが、少くとも中期後半頃からは多くの丘陵性集落が営まれるようである。

古墳時代に入ると、在地首長墓クラスの古墳が築かれるようになる。小泉大塚古墳（前期・前方後円墳、全長約80m）、六道山古墳<sup>註5</sup>（前期末～中期初・前方後円墳、全長約100m）、瓦塚1号墳<sup>註6</sup>（中期前葉・前方後円墳、全長約93m）、小泉東狐塚古墳（後期・前方後円墳、全長約38m）などである。一方、大型横穴式石室墳である笛尾古墳（円墳、径約27m）、割塚古墳（円墳、径約49m）の存在も注目される。このように、この地域一帯の首長墓の系譜が前期～終末期までたどることができ、古墳時代を通して比較的安定した在地勢力があったことをうかがわせている。その反面、群集墳の築造は著しくなく、わずかに単独立地の小古墳を数基認めるに過ぎない。

註4  
小泉城は、中世室町～江戸期にかけて発達した城郭で、大乘院方衆徒片桐氏の拠城であった。複郭の構造をとり、堀の遺存状態も良好である。



写真3 周辺の遺跡（上が北）

### III 調査の概要

#### 1. 遺跡の概観

菩提山遺跡は、県道斑鳩・大和郡山・奈良線沿いの丘陵地に立地する。この丘陵は、矢田丘陵の裾部に展開する低い支丘陵の一つで、西方から幅200~300mの規模で東方に伸びている。比高10~15mの丘陵地であり、北側の斜面は急であるが、南側斜面はゆるやかな傾斜を成している。調査地周辺は、竹林・畑・墓地・柿畠・雜種地等に利用されているが、古墳の存在を示すような隆起地形もなく、墓地のある南斜面に向ってゆるく傾斜する程度の、ほとんど平坦地ともいえる表面地形を呈している。従前の奈良県教育委員会による分布調査によって弥生~古墳時代の土器が散布する遺跡として遺跡地図に記載・登録されていたが、その後、調査を受けることなく今日に至ったのであった。今回の調査は、開発行為（公共事業）を直接的契機とする行政調査であったが、古墳2基、堅穴式住居4棟などを検出することができた。いずれも削平が著しく遺存状況は良くなかったが、弥生~古墳時代にかけての様相が明らかにされたことは意義深い。弥生遺跡の存在は、サヌカイト片の散布状況から十分予想されていたが、古墳の発見は意外であった。従前からこの地域には数基の中型古墳は認められてはいたが、群集墳様の小古墳については皆無に近い状況にあっただけに、今後当該地の古墳文化の盛衰を考える上で格好の資料を提供したといえるであろう。また、奈良時代の遺物・遺構も若干ではあるが検出されており、遺跡は弥生~奈良時代に亘る複合遺跡とするこ



図3 遺跡周辺の地形 大和郡山市基本図13 1:2,500地形図(1985)使用

とができる。なお、調査終了後に行った分布調査の結果によれば、さらに遺跡範囲が拡大することが予想され、今後大規模な丘陵性遺跡群として注目されるであろう。

## 2. 遺構

### 菩提山1号墳

周溝芯々径約18mの円墳で、周溝は幅2~4m、深さ0.2~0.6mを測る。周溝内の堆積土は、深いところで3層に分層でき、淡茶色土層・暗褐色土層・褐橙色土層が堆積する。溝内からは、須恵器・円筒埴輪・形象埴輪(蓋)などの古墳に伴う遺物が多く出土しているが、その他に弥生式土器・石器(石槍・太形船形石斧)の弥生時代遺物、瓦器碗・瓦・羽釜などの中世遺物も含まれている。円筒埴輪は各地区からまんべんなく出土し、特定の場所に集中する状態ではなかった。形象埴輪では、蓋形埴輪が目立つが、個体数にすれば数個程度樹立されたものであろう。他に全形は不明であるが形象埴輪片が出土している。8~9C区で円筒埴輪の裾付穴を2基確認している。埴丘裾部に当たる位置に、約1.5m間隔で配置された径約20mの小穴である。埴丘・主体部は、削平されて全く遺存していない。

### 菩提山2号墳

1号墳の南東で検出された周溝芯々辺約12mの方墳である。幅1.0~2.0m、深さ0.1~0.2mの周溝が廻る。溝内からは、少量の弥生土器片、サヌカイト片などが出土したのみで、古墳の築造時期を決定づけるような遺物は出土していない。中央部で主体部がかろうじて検出された。長約3.4m、幅約0.5mの墓壙に長さ約3.3m、幅約0.3mの割竹型木棺を直葬する。墓壙の残存深は9cm、棺の残存深は7cmほどである。よくぞ残っていたものだ。棺東小口部に鉄製品がまとまって副葬されていた。内訳は刀1、鉗1、斧1、鎌1、刀子1、不明3の計8点である。刀は切先を東に向か側面に添えられ、刀のほぼ中央部に刀子が置かれていた。他は棺の最深部でまとまっている。刀の切先部は南北の搅乱溝によって失われており、また他の鉄器類も表土下で検出されるという状況にあったので、この他に鉄器が若干副葬されていた可能性も残されている。東小口部から約1.3m、西小口部から約0.6mの位置には、棺底に設けられた突起様施設の掘方があり、墓壙輪郭線と一体となっている。東側のものは明瞭に検出され、墓壙には淡明茶色土が堆積し、またその堆積の様相から割竹型木棺下半部と同じような断面U字形の形を呈する突起物が設けられていたと思われる。

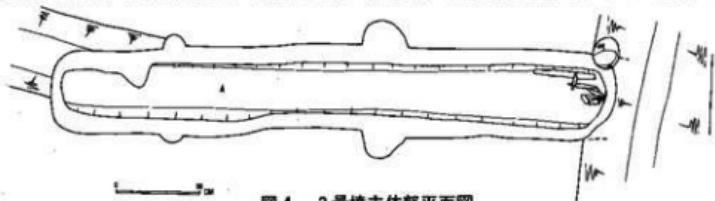


図4 2号墳主体部平面図

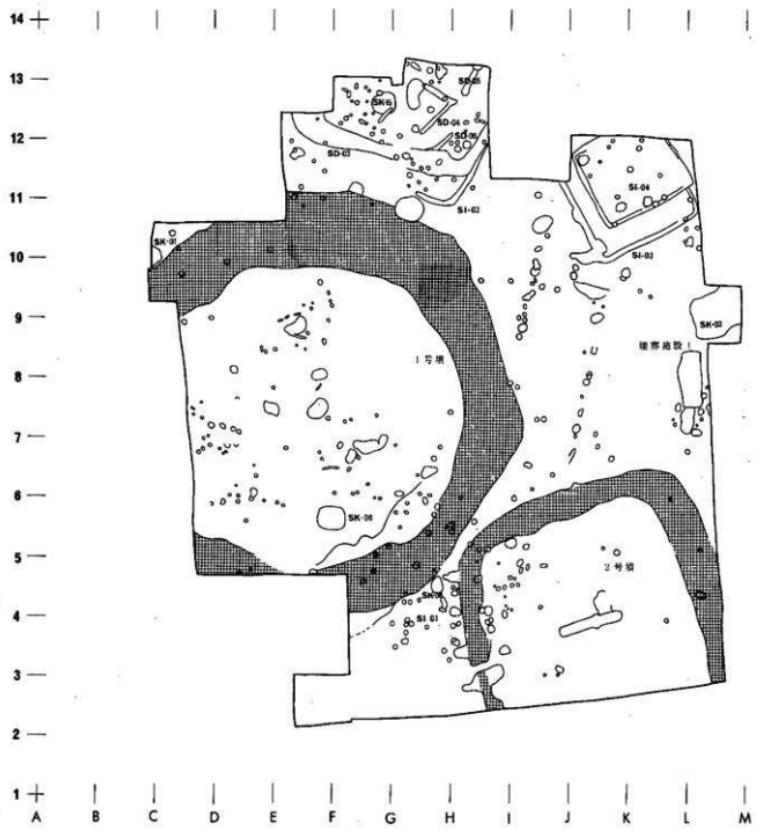


図 5 調査区平面図 (メッシュは  $3 \times 3$  m)

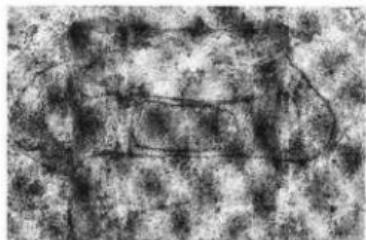


写真4 2号墳主体部  
棺底施設の検出状況（西から）

その用途はよくわからないが、組合型箱形木棺の棺底に2枚矧底板の補強を目的としたいわゆる蟻棲が設く例を参照にすれば、本例も木棺下半部の補強を図るために取りつけられているのかもしれない。ただ、このように考えると、剖竹型木棺は削り抜き式ではなく、2枚合せの構造をとった場合をも想定せねばならない。詳細は以後の検討に委ねておきたいと思う。

#### 1号堅穴式住居（S I-01）

3G～5G区では、SK-08を中心比較的安定したピット群が展開しているが、SK-08を住居中央に設けられた地床炉を考えると、周りのピットも柱穴として素直に理解され、西田中遺跡S<sub>1-02</sub>に類似した主柱構造を探るものと推定される。床面も削平されている状態で、周壁溝も全く遺存しない。正確な規模は不明であるが、径6～7mほどの円形住居が復元されようか。出土遺物はほとんど無く、詳細な時期比定は難しいが、西田中遺跡の様相からみて、弥生中～後期という幅広い年代の中で把えておきたい。

#### 2号堅穴式住居（S I-02）

11G～12G区で検出された一辺約5.5mの隅丸方形住居である。東南辺の周壁溝は、幅20～25cm、深さ7～13cmを測り残存状態も良好であるが、他の部分での周壁溝は部分的に残るのみである。床面まで削平されているため覆土もない状態である。炉の有無は不明、主柱構造についても今少し検討が必要である。住居内を溝SD-04・06が北東～南西方向に伸びている。この内、SD-04は北辺の周壁にあたって止まっている。この2条の溝を間仕切り用の溝とみると、いわゆる外溝とみるか検討の必要がある。所属時期については、決定的遺物を欠くため速断はできないが、先の2号住居址や後述する3・4号住居址の平面プランの変遷からみて弥生後期に比定するのが妥当と思われ、また、2号住居を切って溝SD-03がつくられるが、このSD-03内には弥生後期の土器片が目立って出土している。もともと住居址の覆土を切り込むようにして設けられた溝であるため、両遺構が重複する部分に弥生後期の土器が多いことも消極的ではあるが、所属時期の目安となろう。一方、SD-04の延長線上で検出した溝SD-05内からは、後期の甕、長頸壺が一括出土している。両溝を一連のものとみれば、さらに所属時期が限定されよう。

#### 3号堅穴式住居（S I-03）

調査区の北東端、10～11J・10～11K区で検出した方形住居で、4号住居と重複する。一辺約5.4mを測り、西辺での壁高は約25cmである。周壁溝は幅22～30cmの規模。覆土は褐色系土が主であり、遺物は少ない。貼床はなく、砂質土から成る地山を床面とする。主柱穴は4本であり、約2.8m間隔で並ぶ。所属時期については、周壁溝から出土した小形甕の年代からみて古墳時代初頭

ごろに比定される。

#### 4号堅穴式住居 (S I -04)

3号住居に後行する一辺約4.5mの方形住居で、3号住居より一回り小さい。周壁溝は幅約16~28cmを測る。4本柱主柱構造で、中央に径約40cm、深約25cmのピット、北西隅に60×45cm、深さ20cmのピットがある。一部に貼り床が認められた。住居址中央部では炭・灰の堆積が著しい。床面出土土器は布留式に比定される。

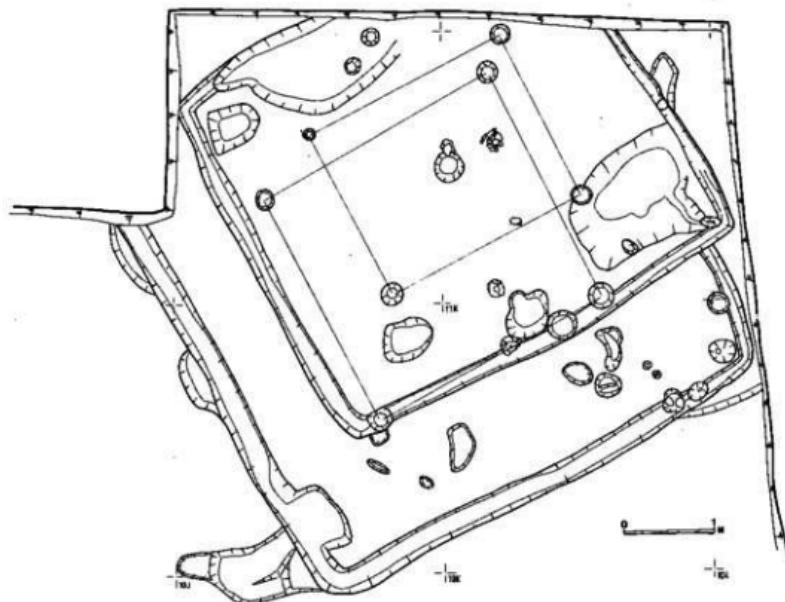


図6 3・4号堅穴式住居平面図

土坑は約17基検出している。時期は弥生~奈良時代にわたるが、ここでは主なものについて述べる。

#### 土坑SK-01

調査区の北西端部、1号墳の周溝下層で検出した径約0.8m、深さ約0.4mの土坑であり、暗灰褐色土・褐色土(炭・混)・青灰茶色土が堆積する。坑底には割石が掘えられたような状態で出土している。このSK-01の東側には深く安定したピット2基が約2.1m間隔で並んでいる。すなわ



写真5 4号住居址周壁  
溝（東から）

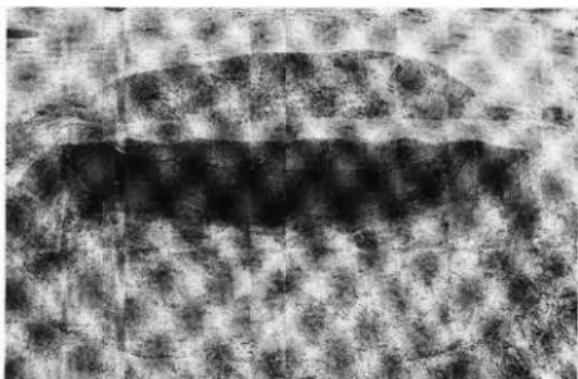


写真6 土坑SK-06堆  
積相（西から）



写真7 土坑SK-02堆  
出土状況（西から）

ち、SK-01を住居址中央の地床炉とし、その周りのピットを4本柱構造による主柱穴の内の2基と考えれば、竪穴式住居が復元される可能性も残されている。

#### 土坑SK-02

調査区の東辺拡張区(8L～9L区)において検出された奈良時代の土坑である。幅約2.2m、長約2.4m以上で、西方に向って開く不整形な形態をもつ。深さは0.7m前後。上層からは土師器・長胴壺が口縁部を北に向け横位状態で出土し、また、その東側からは加熱を受けて赤変した40×50cmほどの石材が出土している。石材の周囲には炭・灰層が著しい。下層からは上層で出土したのと同じ形態・特徴をもつ土師器長胴壺や須恵器片が細片となって出土している。

#### 土坑SK-06

1.3×1.5m、深さ0.3mを測る不整円形土坑である。坑内には焼土塊がブロック状に堆積し、炭化粒・炭を含むが、坑壁・坑底には焼化した様子はなかった。サヌカイトの剥片が大小とりませて約50点出土し、櫛描直線文・流水文をもつ上器片も少量出土している。生駒山西麓産の胎土をもつ上器片も2点ほど認められる。中期。

#### 土坑SK-08

平面0.9×0.6m、深さ0.1mの不整円形土坑で淡褐色土・黒灰色土・茶橙色土が堆積する。坑内からは土器片がごく少量出土したのみである。黒灰色土層内には多くの炭粒があった。さて、このSK-08を中心にして周辺には多数のピット群が存在し、また深く安定したピットも多い。このSK-08を地床炉とし、竪穴式住居S I-01が復元される。

#### 土坑SK-15

12F区で検出された円形土坑。径約1.2m、深さ約0.9mを測り、坑底は平坦である。坑内には、明茶黄色土・淡灰黄褐色土・灰黄色土が堆積する。この堆積土は、他の遺構にはほとんど認められ

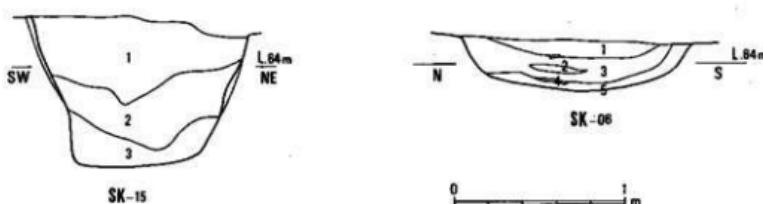


図7 土坑SK-06・15断面図

SK-15	SK-06
1. 明茶黄色土層	1. 淡灰褐色砂質土層
2. 淡灰黃褐色土層	2. 赤茶色燒土塊
3. 灰黃色土層	3. 暗褐色土層
	4. 赤茶色燒土塊
	5. 淡褐色土

ないものである。出土遺物はサヌカイト剝片約50点、土器はほとんど認められない。2号竪穴式住居S I -02は、この土坑廃絶後に構築されている。

#### その他の遺構

##### 埋葬施設 1

調査区の東辺、7～8 L区で検出した時期不明の埋葬施設で、木棺を直葬したものである。墓壙は、南北2.9m×東西1.2mを測る。棺は墓壙の東端によせて埋設され、その規模は50×240cmほどになる。墓壙底の形状から考えて箱形木棺であったと思われる。棺内落込み土からは、土器や鉄釘等の遺物は全く出土していない。棺の北・西・南側には厚さ約15cmの橙色粘土が認められた。棺側をとりまく粘土である。東辺では全く認められなかった。壙内埋土からサヌカイト片等が数点出土しているが、所属時期の決め手に欠ける。この埋葬施設の周辺には、これを開画するような溝などの関連構造は全く検出されていない。

### 3. 遺 物

出土遺物は、通常法量のコンテナ約40箱程であり、その大部分は1号墳の周溝から出土した円筒埴輪である。遺物整理が始ったばかりであるので、ここでは目立った遺物のみ報告したい。

#### 第4号竪穴式住居址出土遺物（図8-1・2、図版9-1～4）

1（図8-1、図版9-1）は、二重口縁壺の口頸部断片で、口径は不明、頸部は短く外反し、一条の凸帯を経て幅広の口縁部へ至る。口縁端部は丸みをおびて外方に突出する。体部外面は横はけの後よこなでにより調整し、体部内面はへら削りにより器厚を減じる。口頸部外面はよこなでにより調整する。淡茶褐色を呈する。山陰系の土器であり、床面直上から出土している。2（図8-2、図版9-3）は、口径約15.2cm、杯部高約5.0cmを測る高杯である。脚部は、挿入付加によつて形成する。表相磨滅のため調整技法は判然としない。きわめて精良な胎土で、焼成は良好、明茶橙色を呈する。床面から出土している。

この他、2と同形態の高杯や叩石様の石器（図版9-4）が出土している。

#### 土坑SK-06出土遺物（図版10-1～5）

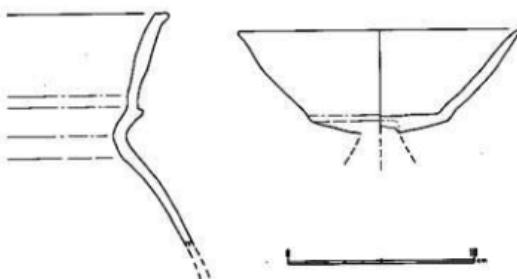


図8 第4号住居址床面出土土器実測図（S=1/3）

土坑SK-06からは、弥生式土器、サヌカイト製の石核・剝片が出土している。中期の壺・壺等であり、櫛描直線文・流水文が認められる。櫛描直線文は、その内の一条が鋭い沈線状に表現され、また流水文も直線文と扇

形文を組み合わせることによって表現されるなど、中期の中でも古い様相をもっている。また、いわゆる生駒山西麓産の特徴的胎土を有する土器も認められる。Ⅲ様式期に推定しておきたい。同土坑からはサヌカイトの石核・剝片なども約50点出土しているが、製品は認められない。

#### 2号墳主体部出土遺物（図版7-1～7）

1は残存長約36.2cm、刃部幅3.2cmの鉄刀で、背棟幅約1.0cm、無闇式でなだらかに茎部へ移行する。切先は欠損している。

2は、全長約19.4cm、幅約1.4cmの鉈である。3は鍔型の鉄斧で、全長約5.4cm、刃部幅約3.1cm、刃部厚約1.0cmを測る。木製柄部の装着は定かでない。4は刀子で、全長約11.1cm、刃部長約8.5cm、茎長約3.0cm、刃部幅約2.0cm、茎幅約1.5cmを測る片闇式の刀子。5～7は銹化が著しく不明であるが、6はタガネ状の鉄器である。

註12

1号墳周溝からは多量の埴輪が出土している。円筒埴輪が大部を占めるが、朝顔型埴輪・形象埴輪（蓋）も若干認められる。その他、弥生時代の土器・石器（石鎌・石槍・石斧）や7世紀代の土師器・須恵器、中世の瓦器碗・羽釜なども出土している。また、初期須恵器の範疇に入るような古い様相をもつ須恵器の破片が出土しており、おそらくこれが1号墳の築造時期を示すものとすることができる。

#### 1号墳周溝内出土遺物（図9-12、図版8-11・12）

1（図版8-1）は、凸基有茎鐵で、全長約2.4cm、幅約1.9cm、厚さ約0.35cmを測る。2（図版8-2）は半基無茎鐵で、全長約3.6cm、幅約1.5cm、厚さ約0.5cmを測る。3（図版8-3）は全長約15.2cm、幅約2.8cm、厚さ約1.7cmを測る石槍である。4・5（図版8-4・5）は太形始刃石斧の刃部断片であり、いずれも玄武岩質凝灰岩を石種とする。4の刃部先端は使用により欠壊している。

図9-1～9（図版11-1～9）には、いわゆる記号文の描かれた埴輪を報告する。1・2は同じ記号文で、弧線から2条の斜線が派生する。3もその一部である可能性がある。1は朝顔型埴輪の蓋状部であり、記号文の天地は判然としている。4～8は、矢羽状の文様であり、特に5は鮮明である。5は普通円筒埴輪の直上型口縁部であり、文様の天地が確認される。9は、竹管状具により円形文が表現される。以上、確かに幾何学的な文様もあることは事実だが、弥生式土器にみられる具象的な記号に類似したものもあり、単に埴輪製作工人（集団）の巣属関係や窯詰め時の配置関係を示すものではなく、埴輪祭祀の呪的特性の中で語られるべきものとも思うが、その比較検討は以後に委ねたい。

図10-1～3（図版8-6～9）は、壺形埴輪である。1は笠部断片で、先端部は幅2cmの突帯状に収める。荒い横ハケ・斜ハケを施し網代様の表現をなす。2・3は、四方飾板の断片であり、

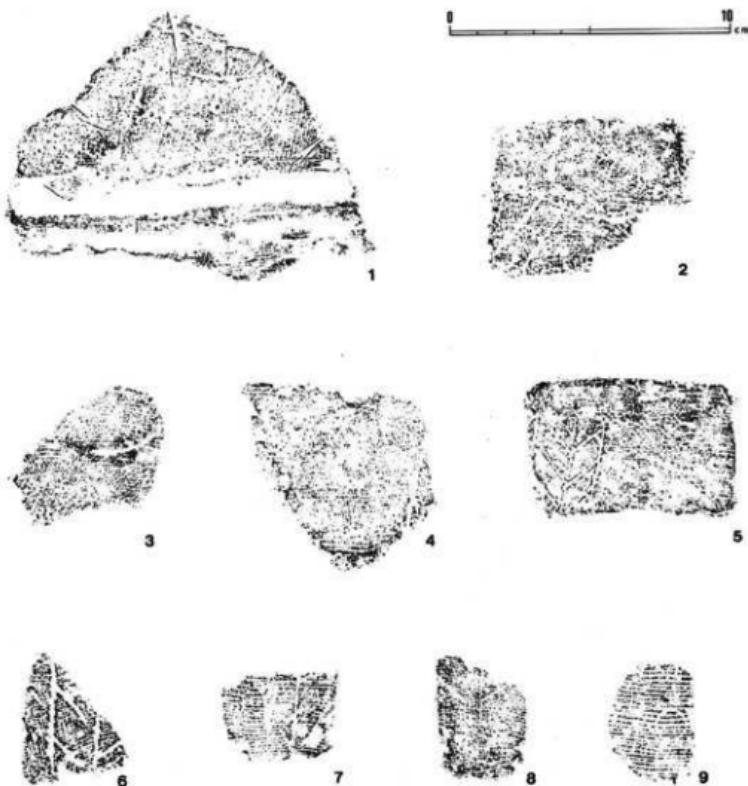


図9 1号墳周溝出土埴輪（記号文）拓影 S=1/2

2はハケ調整を施すが、3はナデによる調整が主体である。

図11・12、図版11・12には普通円筒埴輪を示す。10の外面にはB種ヨコハケ（8・9条/cm）が施され、その休止痕は斜45°に傾く。内面はナナメハケ及びナデによる調整である。11の外面にもB種ヨコハケが著しいが、その休止線は垂直に近い。12の外面には一次調整のタテハケ8条/cmが残る。13は、口縁部の破片で、外面には丁寧なヨコハケ、内面はナナメハケで調整する。14も口縁部であり、端部は平坦に収める。15も14とほぼ同じ特徴をもつ口縁部であり、同一個体の可能性がある。16は硬質に焼成されているが、17はいわゆる土師質様の焼成で、突帯は低い。18は口縁部断片で多面には波状のB種ヨコハケが施される。20はいわゆる須恵質埴輪で、青灰色を呈する。外面

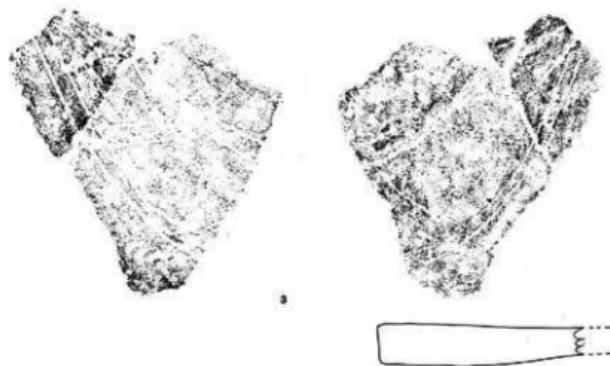
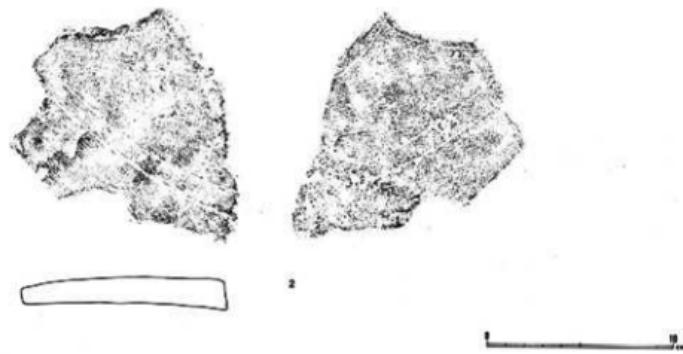


图10 1号填周沟内出土形象墙砖拓影 (S=1/3)  
1 (图版8—5)、2 (图版8—7)、3 (图版8—9)

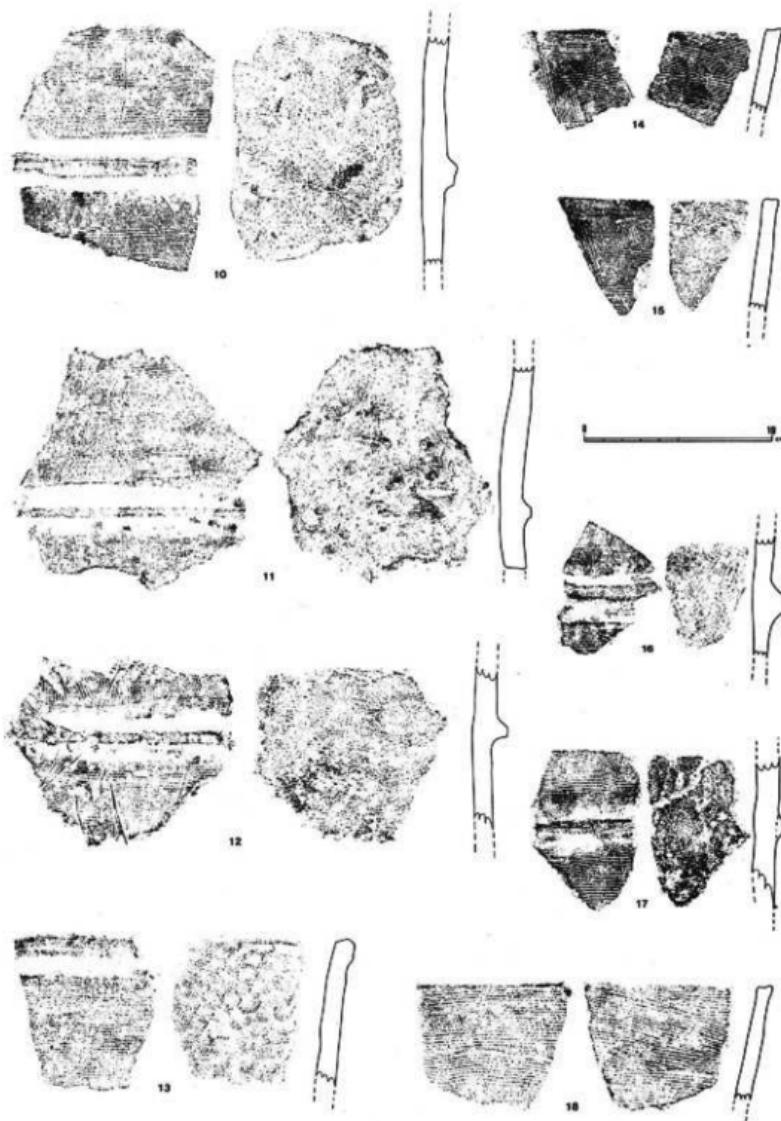


图11 1号填周沟内出土埴輪拓影 (S = 1 / 3)

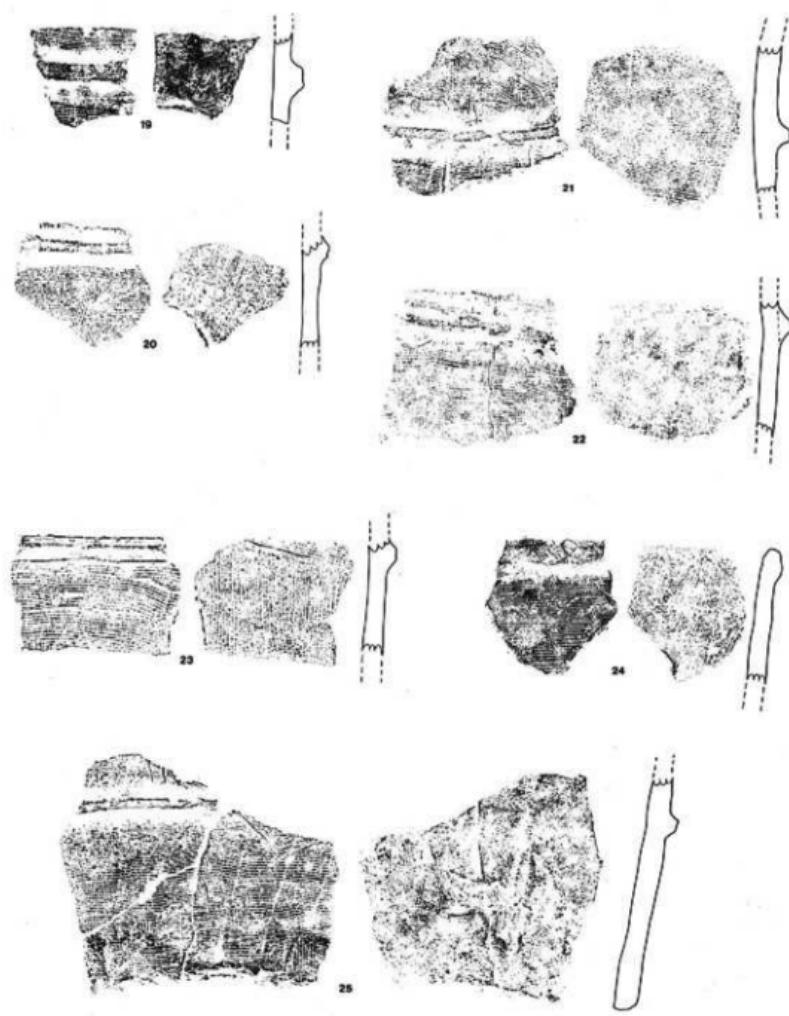


图12 1号填周沟内出土埴輪拓影 (S = 1 / 3)

にはB種ヨコハケと副次的タテハケが認められる。21の外面には、タテハケ後ナナメハケが施されるが、B種ヨコハケも認められる。朝顔型埴輪の可能性もある。22の外面にも波状のB種ヨコハケが施され、動作単位長は2~3cmほどである。23は須恵質で、外面調整は22に類似する。24は口縁部で、端部は13と同じく粘土付加により突起様に収める。25は底部破片で、外面にはB種ヨコハケが著しい。休止線は斜位であり、動作単位長も2cm前後と短い。底部には植物状の線状圧痕が残る。内面は強いタテハケで器壁を減じるように施し、また、最下部にはヘラ削りによる底部内面調整を施す。

#### IV 総 括

今回の調査によって菩提山遺跡は弥生時代中期~奈良時代に及ぶ複合遺跡であることが判明した。遺構の数はそれほど多くはないが、こうした丘陵性遺跡の動向を考えるうえでいずれも重要な意義を担っている。特に弥生時代中期~古墳時代初頭に至る居住域としての変遷の様相は、現富雄川流域の低丘陵地に数多く展開する該期の丘陵性遺跡群の盛衰を考えるうえできわめて重要な資料となる。一方、居住域の後、遺跡は墓域となり、2基の中期古墳が築かれる。規模はさほど大きくなはないが、従来この地域がこうした小規模古墳の空白域とされていただけに、その存在の意味は重い。その後、7~8世紀に入り、小規模ながらもこの地が利用されたことも、出土土器が物語っている。ここでは、概要報告という性格もあるのであまり詳しくはふれられないが、幾つか問題となる点について、つれづれなるまことに筆を進めておこう。

まず竪穴式住居の変遷について。不明な点、検討すべき点も多いが、弥生時代中期~古墳時代初頭への居住構造の変化がよく読みとれる。一時期に一棟の住居しか確認できなかったが、調査区の西側部分にも居住域が伸びている可能性はきわめて高く、今後の調査如何でこの集落の規模がはっきりしてくると思われる。さて、この地域の丘陵地にはこうした遺跡が多いことが知られている。西田中遺跡(弥中~後)小泉遺跡(弥・中)、六道山遺跡(弥中~後)などであり、最近調査された三井岡原遺跡(斑鳩町)<sup>在13</sup>でも弥生後期の竪穴式住居が5棟検出されている。いずれの遺跡も矢田丘陵の南・東南裾部に位置する比高10~15m前後の低丘陵地に立地し、その多くが中期後半(Ⅲ様式期)に経営を開始し、後期まで存続するなどの共通点をもっている。しかし、三井岡原遺跡のように後期という時間帯の中で終始する遺跡も存在し、今後各遺跡の消長を確実におさえることが、この種の遺跡の相互関連を考える上で必要となってきた。菩提山遺跡も弥生中期には形成がはじまるが、その終束は古墳時代前期の時期に求められ、従来の遺跡の消長とは若干様相が異なることが知られた。1984・85の2次にわたる西田中遺跡の発掘時の考え方として、この種の丘陵性遺跡群に対しては、小規模な農耕集落とみるのが妥当であるという見方が提出されていたが、布留式期までの継続状況をみると、あるいはまた、河内平野方面へ抜けるルート上に位置する点などを考え合わせると、さらに複雑な要素を帯びて遺跡が展開しているのかもしれない。

	墳形・規模	主体部・副葬品	外部施設
菩提山1号墳	円墳 径約18m (周溝芯々)	不明	周溝幅約2~4m 埴輪 (円筒・朝顔形・蓋形)
菩提山2号墳	方墳 辺約12m (周溝芯々)	割竹形木棺直葬 斧1 刀1 鐵1 斧1 刀子1 不明3	周溝幅約1~2m

表1 1号墳・2号墳の様相

古墳時代前期の小規模な集落が廃絶した後、この地には、菩提山1・2号墳が築造される。1号墳は、川西編年第IV期の埴輪をもち5世紀後半に築造されたものと考えられる。一方、2号墳については、今少し検討を加えた上で築造時期の詳細を考えたいと思うが、現時点では1号墳とさほど前後しない時期に築造されたものと推定しておきたい。1・2号墳の墳形・規模・外部施設などは表1に示す通りであるが、全く異なる墳形を採る点、1号墳では埴輪を樹立するが、2号墳では全く使用されないなど、2基の古墳の対照的な様相には興味深いものがある。2基ともに著しく削平された状況で検出されたため不明な点を多く残しているのも事実であり、今後、こうした凹墳と方墳が組み合う例を参照に、より詳細な検討を加えなければならないと思う。さて、この古墳群が一体どの程度の数から構成されていたか。11F~11G区で検出された方形に廻るSD-03も2号墳よりさらに規模は小さくなるが、同じように方墳であった可能性も残されている。また、調査区の西側には比較的平坦な地形と、南へ開く緩斜面があり、表面上は古墳の存在を認めるることはできないものの須恵器片などの散布状況から考えて、墳丘が削平された状態の埋没墳が存在することも十分に予想されることである。周辺地域の調査の進展如何によっては、さらに構成規模の大きな古墳群となることも予想しておかねばならないと思う。この地域では、小泉大塚古墳、六道山古墳、瓦塚1号墳・小泉東狐塚、笠尾古墳など、前期~終末期に至る在地系首長墓が展開しているが、中~後期の中小古墳、特に群集墳の存在はほとんど皆無に近い状況であった。しかし、今回の菩提山1・2号墳の発見によって、この地域の丘陵地にも中期段階からいくつかの中小古墳が存在していたことが判明した点は、大きな成果であった。時期的には、瓦塚1号墳と東狐塚古墳の間に埋めるものであるが、一連の首長墓の系譜とは別に把える必要があると思われる。ところで、2号墳にはいわゆるミニチュアの鉄斧が副葬され、棺底に類例のない施設を設けるなど特異な様相があり注目される。ミニチュア鉄斧は、御所市石光山古墳群、権原市新沢千塚古墳群などで數例出土しているが、県内でもそれほど出土例は多くない。また、棺底の施設についても、組合式箱形木棺の底板の補強を目的としたいわゆる蟻棧の例は、三倉堂遺跡3号木棺、石光山48号墳、新沢千塚162・272号墳などで知られてはいるものの、菩提山2号墳の場合は割竹型木棺にとり付く例であり、しかも、棺底の形状と同じU字形を呈するという類例の無いものである。詳細は後日を期したいが、1号墳の築造時期や2号墳の副葬品組成を考え合せると盆地南西部のいわゆる初期群集墳との類似性も今

後の検討過程で分析の視座の一角に据える必要があるのかもしれない。

- 註1 大和郡山市教育委員会『西田中遺跡第1・2次発掘調査概要報告書』(1985)
- 2 長谷川俊幸「小泉遺跡発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1982年度) 1983
- 3 註1前掲書
- 4 伊達宗泰「小泉孤塚・大塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊) 1966
- 5 白石太一郎「六道山古墳」(『奈良県の主要古墳Ⅰ』) 1971
- 6 久野邦雄・関川尚功『斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報』1976
- 7 伊藤勇輔「東孤塚古墳」(『奈良県文化財調査報告書第28集』『奈良県古墳調査集報Ⅰ』) 1976
- 8 東潮「笛尾古墳発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報』1981年度) 1983
- 9 小島後次「割塚古墳の調査」(『青陵』第14号) 1969
- 10 村田修三「小泉城」(『日本城郭大系』第10巻) 1980
- 11 註1前掲書
- 12 墓輪の記述に際しては、川西宏幸「円筒埴輪論」(『考古学雑誌』第64巻第2号) 1978、及び赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』第90号) 1979を参照した。
- 13 寺沢薰氏(奈良県立橿原考古学研究所)より御教示いただいた。記して感謝いたします。
- 14 奈良県立橿原考古学研究所編 奈良県史跡名勝天念記念物調査報告書第31冊『墓城・石光山古墳群』 1976
- 15 奈良県立橿原考古学研究所編 奈良県史跡名勝天念記念物調査報告書第39冊『新沢千塚古墳群』(1981)

# 図 版



調査区空中写真（西上空から）



(1) 1号墳周溝（東から）



(2) 1・2号墳周溝（北から）



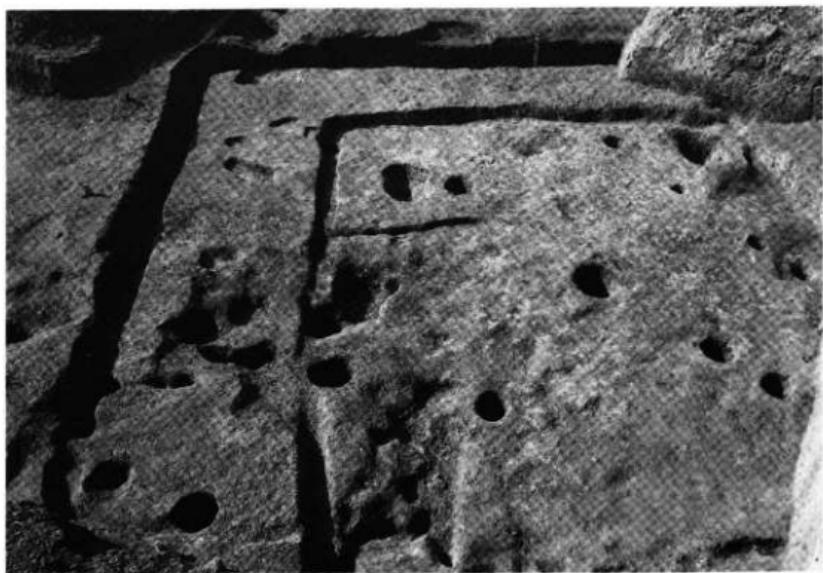
(1) 2号墳周溝（北東から）



(2) 2号墳  
主体部全景  
(西から)



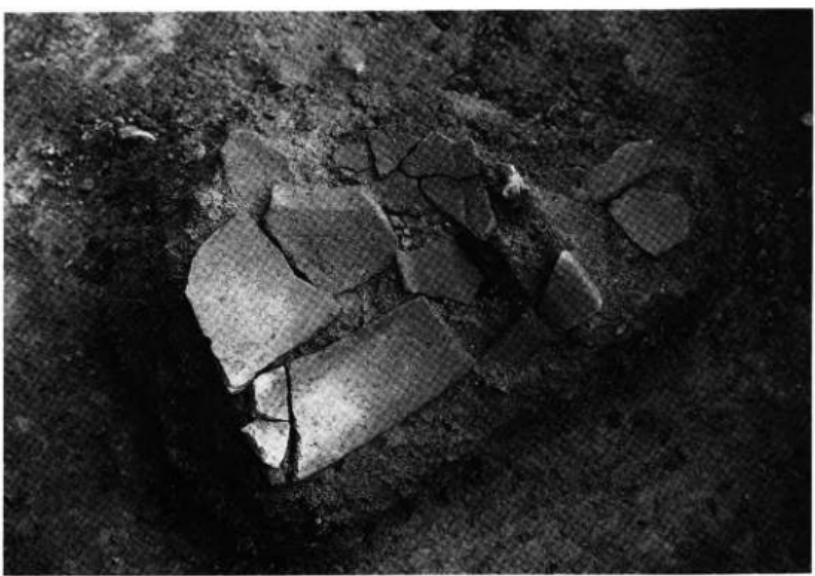
(1) 2号墳主体部鉄器出土状況（南から）



(2) 第3・4号竪穴住居全景（東から）



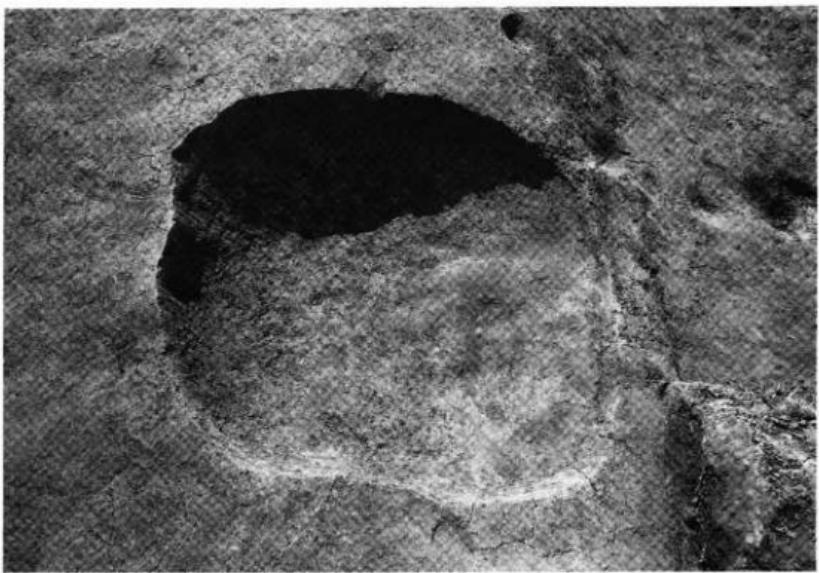
(1) 第4号竪穴式住居の周壁溝（北から）



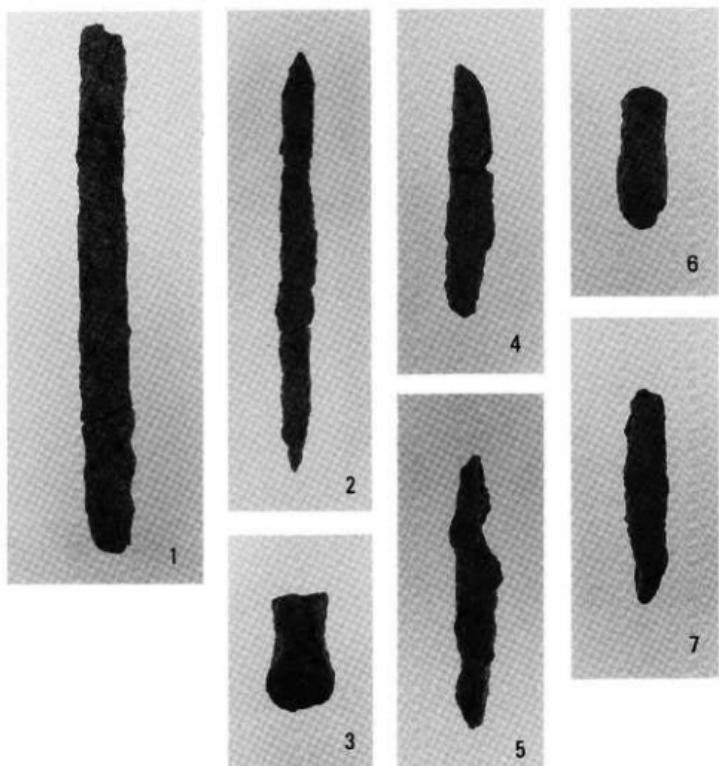
(2) 第4号竪穴式住居床面の土器出土状況



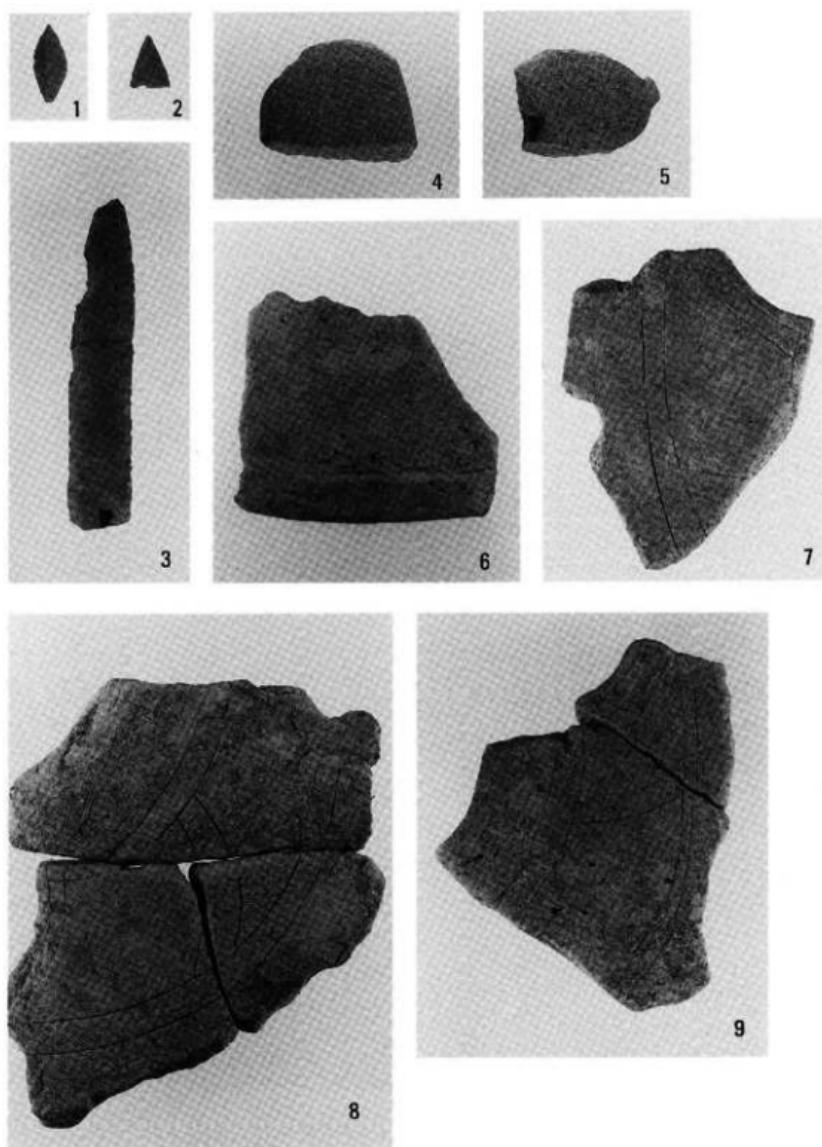
(1) 埋葬施設 1 全景（西から）



(2) 土坑 S K-06全景（北から）



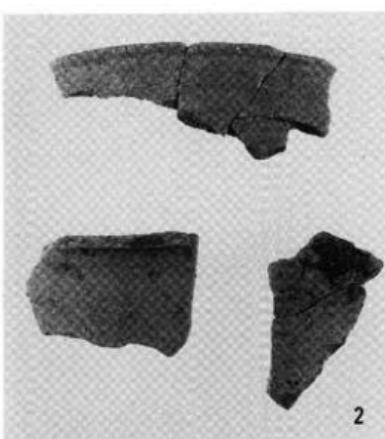
2号墳主体部出土鉄製品



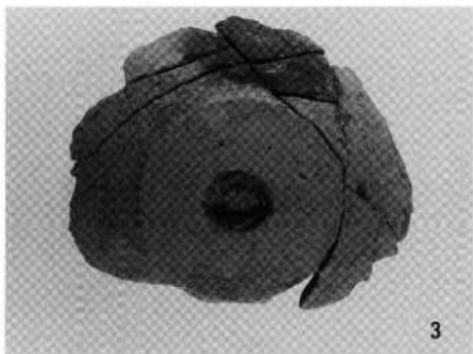
1号墳周溝出土遺物



1



2

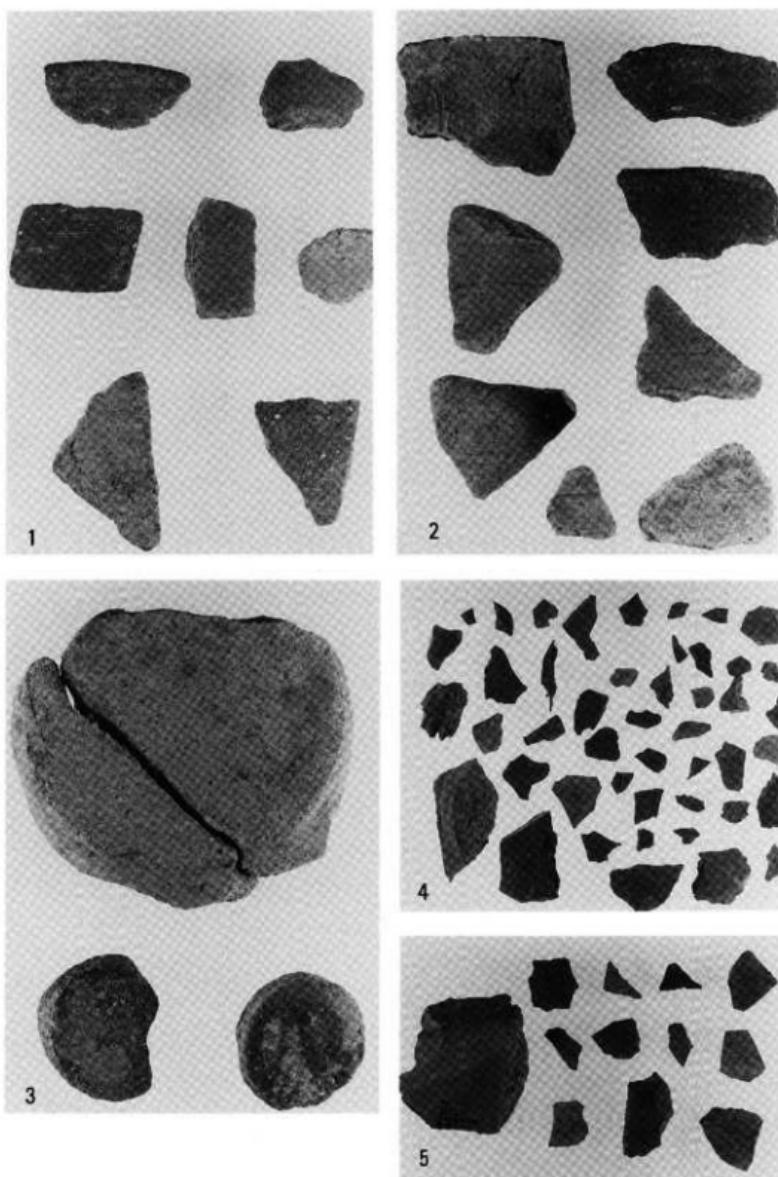


3

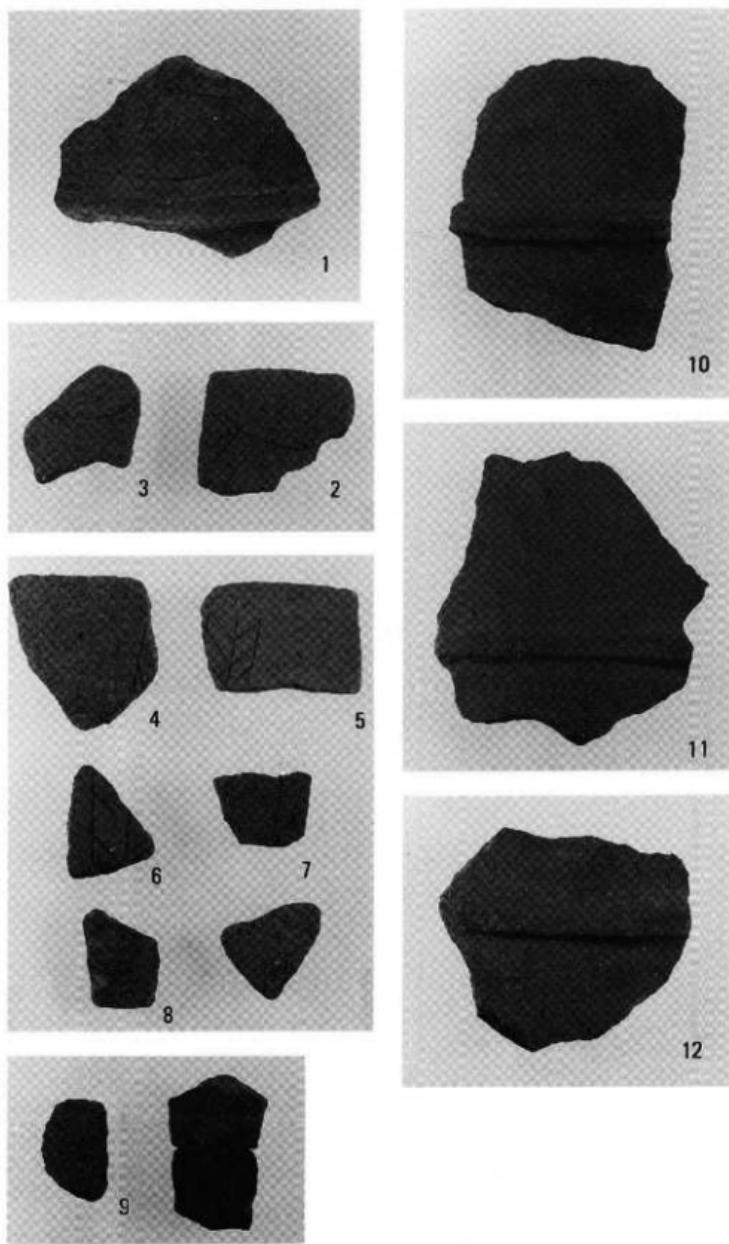


4

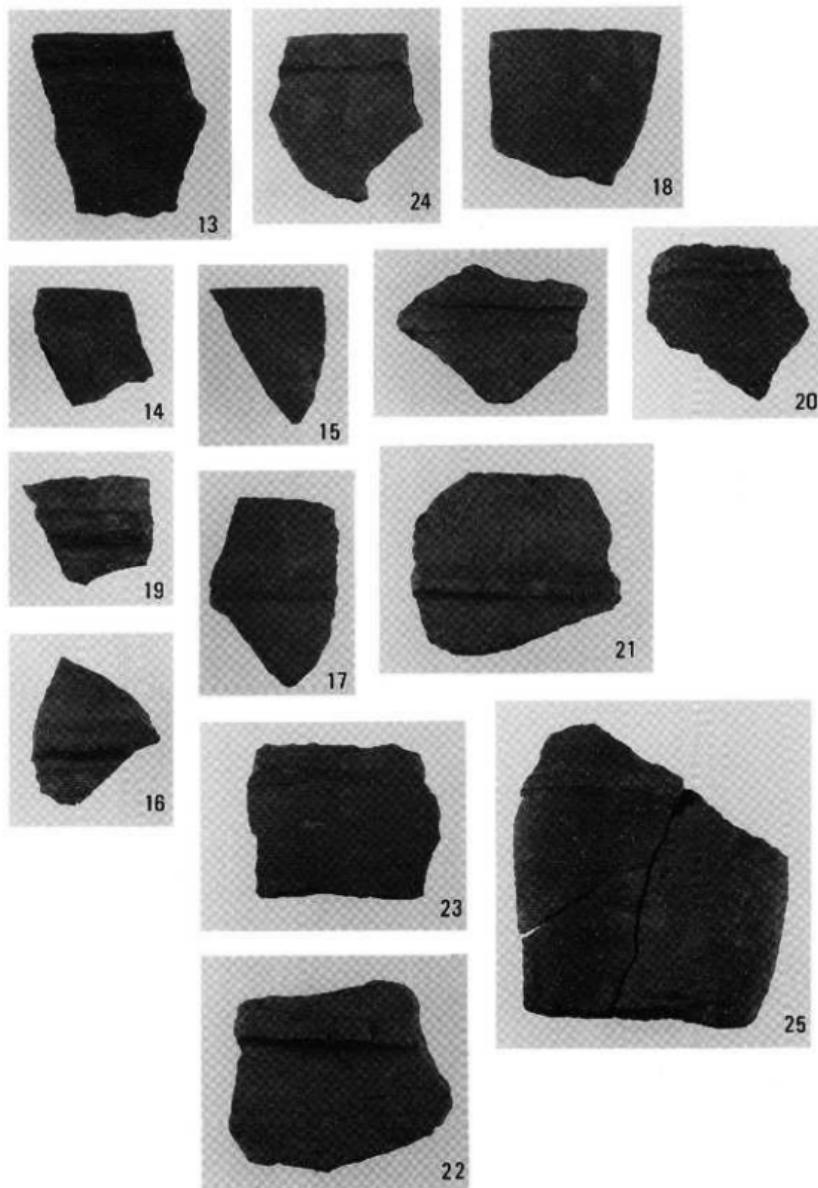
第4号竪穴式住居床面出土遺物



土坑SK-06出土遺物



1号墳周溝出土埴輪（番号は実測図番号（図9・11）に一致する）



1号墳周溝出土埴輪（番号は実測図番号（図11・12）に一致する）

昭和63年3月31日

大和郡山市文化財調査概要 10

菩 提 山 遺 跡

発掘調査概要報告書

編集行 大和郡山市教育委員会  
大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社  
奈良市樋本町36番地